

日本語教育人材の養成・研修に関する概要

【Ⅰ】活動分野 **国内**・**海外**

日本語教育の対象者:外国人全般、日本語非母語話者全般

【Ⅱ】日本語教育人材の役割 : **日本語指導者**・日本語指導補助者・コーディネーター

【Ⅲ】人材養成・研修の概要

1. 機関・団体	名称:学習院大学
	主な日本語教育事業 ○文学部日本語日本文学科日本語教育系 ○人文科学研究科日本語日本文学専攻(日本語・言語・日本語教育の専門分野・領域)
2. 養成・研修概要	1) 研修・講座の名称:特になし
	2) 研修の目的及び育成しようとしている人物像: 1. 日本語教師として教育活動に従事できる基礎的な知識・能力を有する者 2. 日本語教育における新たな課題に対し、適切に取り組むための知識・能力・資質を有する者 3. 日本語教育活動において、自ら問題点を発見し、改善のための方策を検討・実施できる者 4. 日本語教育に関する基礎的な知識・能力を有し、在住外国人・日本語学習者に対して、適切に接することのできる者
	3) 研修対象・受講資格:原則として日本語日本文学科又は日本語日本文学専攻在籍者
	4) 受講方法:通学
	5) 研修実施時期及び期間:通年。学部1年～4年、博士前期課程～後期課程。
	6) 研修実施時間数:・131単位(学部日本語教育系卒業に必要な単位数、1単位平均11.25h)・30単位(博士前期課程)、・20単位(博士後期課程)
	7) 受講料:年間授業料75万円(学部)、51万円(博士前期)、48万円(博士後期)
	8) 教育実習・実践演習等の有無:有(学部「日本語教育Ⅲ」において、日本語学校、海外日本語教育機関、区教育センター、学内日本語教室等において、40時間の実習を実施。) ○科目外の活動として、以下のような実践機会を設けている。 1. 学内日本語教室の実施(学部生中心、院生中心) 2. SA(Student Assistant)活動 3. 区教育センターでの学習支援 4. 海外日本語教育研修旅行 5. 海外日本語教育実習生(インターン)派遣
	9) 修了要件:大学の卒業要件を満たし、かつ、日本語教育系必修科目79単位(内、日文科専門科目65単位。専門科目には卒業論文12単位が含まれる)及び選択科目36単位(内、日文科専門科目16単位)、自由科目16単位、計131単位(学部)以上修得していること。卒業論文に加え、卒業試験に合格する必要がある。博士課程前期は30単位、博士課程後期は20単位。
	10) 評価及び認定の方法:科目により評価方法は異なる。単位認定は学則に則って行われる。「日本語教育系」としての卒業となる。
	11) 受講修了者の進路(活動分野):<学部>日本語教師(国内外)、国語教師、大学院進学、公務員、企業(出版社、旅行社、ホテル、報道等)、等 <大学院>日本語教師(国内外)、国語教師、JF専門家派遣、JICA派遣、研究者、企業(出版社、旅行社、ホテル等)

3. 養成・研修の 科目一覧	科目(指導項目)一覧を記載してください。その際、次ページの平成12年「日本語教員養成において必要とされる教育内容」の区分①～⑯のどこに該当する(もしくは内容的に近い)か、番号を記載してください。当てはまらない場合は★を記載してください。既成のシートに番号・★を追記いただくことも構いません。 例)【理論編】ファシリテーション(★) 【実践編】フィールドワーク実習(⑩)			
	* 日本語日本文学科専門科目についてのみ記載 【必修】65 単位 日本語学概論(④⑤⑭⑮) 日本文法(⑤⑬⑭⑮) 日本語学講義Ⅰ(④⑤⑥⑧⑩⑭⑮⑯) 日本語学演習(複数開講:①②③④⑤⑥⑧⑩⑫⑭⑮⑯) 現代日本語研究Ⅰ(⑤⑦⑩⑪⑬⑭) 現代日本語研究Ⅳ(④⑤⑥⑧⑨⑪⑯)	言語学講義<言語学概論>(④⑥⑧⑬⑭⑮) 対照言語学(⑤⑬⑭⑮) 日本語教育Ⅰ(②③⑥⑩⑫) 日本語教育Ⅱ(③⑦⑧⑩) 日本語教育Ⅲ(⑩⑫) 基礎演習Ⅰ(①) 日本文学講義Ⅰ(①④⑤) 卒業論文 【選択必修】4 単位 日本文学史概説Ⅰ(①) 日本文学史概説Ⅱ(①) 日本文学史概説Ⅲ(①)	【選択】16 単位 日本語史概説(①⑬⑭⑮) 日本語学講義Ⅱ(④⑤⑥⑭⑮) 日本語学演習(複数開講:①②③④⑤⑥⑧⑩⑫⑭⑮⑯) 現代日本語研究Ⅱ(⑭⑯) 現代日本語研究Ⅲ(⑭) 日本文学概論(①④⑤) 日本文学研究法(①④⑤) 日本文学講義Ⅱ(①④⑤) 日本文学演習(複数開講:①②③④⑤⑥⑫)	
4. 養成・研修の内容	平成12年の「日本語教員養成において必要とされる教育内容」に含まれるもの ※実施していないものを取り消し線で消してください。(例、 文明 、 哲学) 追加科目を【 】に記載してください。			
	領域	区分	区分(①～⑯)	内容
社会・文化・地域に関わる領域	社会・文化・地域		①世界と日本	歴史、文化、文明、社会、教育、哲学、国際関係、日本事情、日本文学【 】
			②異文化接触	国際協力、文化交流、留学生政策、移民・難民政策、研修生受入政策、外国人児童生徒、帰国児童生徒、 地域協力 、 精神衛生 【 】
			③日本語教育の歴史と現状	日本語教育史、言語政策、 教員養成 、学習者の多様化、 教育哲学 、学習者の推移、日本語試験、 各国語試験 、世界各地域の日本語教育事情、日本各地域の日本語教育事情【 】
	言語と社会		④言語と社会の関係	ことばと文化、社会言語学、社会文化能力、言語接触、 言語管理 、言語政策、言語社会学、 教育哲学 、 教育社会学 、教育制度【 】
			⑤言語使用と社会	言語変種、ジェンダー差・世代差、地域言語、待遇・ポライトネス、言語・非言語行動、コミュニケーション・ストラテジー、地域生活関連情報【 】
			⑥異文化コミュニケーションと社会	異文化受容・適応、言語・文化相対主義、自文化(自民族)中心主義、アイデンティティ、多文化主義、異文化間トレランス、言語イデオロギー、言語政策【 】
			⑦言語理解の過程	言語理解、談話理解、予測・推測能力、記憶、視点、言語学習【 】

	教育に関わる領域	言語と心理	⑧言語習得・発達	幼児言語, 習得過程(第一言語・第二言語), 中間言語, 言語喪失 , バイリンガリズム, 学習過程, 学習者タイプ, 学習ストラテジー 【 】
			⑨異文化理解と心理	異文化間心理学 , 社会的スキル, 集団主義, 教育心理 , 日本語の学習・教育の情意的側面 【 】
		言語と教育	⑩言語教育法・実習	実践的知識, 実践的能力, 自己点検能力, カリキュラム, コースデザイン, 教室活動, 教授法, 評価法, 学習者情報, 教育実習, 教育環境, 地域別・年代別日本語教育法, 教育情報 , ニーズ分析, 誤用分析, 教材分析・開発【 】
			⑪異文化間教育・コミュニケーション教育	異文化間教育, 多文化教育 , 国際・比較教育, 国際理解教育, コミュニケーション教育, スピーチ・コミュニケーション, 異文化コミュニケーション訓練, 開発コミュニケーション, 異文化マネージメント, 異文化心理, 教育心理 , 言語間対照, 学習者の権利 【 】
			⑫言語教育と情報	教材開発, 教材選択, 教育工学 , システム工学 , 統計処理, メディアリテラシー, 情報リテラシー, マルチメディア【 】
		言語	⑬言語の構造一般	一般言語学, 世界の諸言語, 言語の種類, 音声の種類, 形態(語彙)の種類, 統計の種類, 意味論の種類, 語用論の種類, 音声と文法 【 】
			⑭日本語の構造	日本語の系統, 日本語の構造, 音韻体系, 形態・語彙体系, 文法体系, 意味体系, 語用論的規範, 表記, 日本語史 【 】
			⑮言語研究	理論言語学, 応用言語学, 情報学 , 社会言語学, 心理言語学, 認知言語学, 言語地理学, 対照言語学, 計量言語学, 歴史言語学, コミュニケーション学 【 】
			⑯コミュニケーション能力	受容理解能力 , 表出能力 , 言語運用能力, 談話構成能力, 議論能力 , 社会文化能力, 対人関係能力, 異文化調整能力【 】
※3領域5区分以外については、こちらに記載してください。	その他	【キャリア】	【 】	・特別講義あるいは「ようこそ先輩」と題し、日本語教師等、日本語教育分野でキャリアを築いた先輩等を招き、講演を行うもの。
5. 特徴的な内容	貴団体で養成する日本語教育人材の活動分野及び役割に対して、特徴的な内容や近年の変化・変遷がありましたら、記載をお願いします。			
	○主な活動分野・役割 ・日本語教育人材としての活動分野・役割は多様であり、特定の活動分野を挙げるのは困難である(項目「8. 」を参照のこと)。 ○変化・変遷 ・日本語教育系を選ぶ学生数は、1990 年代にピークを迎えた後、現在は学科定員の 30%前後である。その中で、日本語教育及び関連分野を職業として選択する割合(1～2 割)に大きな変化はない。近年は、地域日本語教育のコーディネーターの役割を果たす職に就く者も現れている。			

6. 育成する日本語教育人材に求められる資質・知識・能力 ※御参考:平成12年「日本語教育のための教員養成について」の「日本語教員として望まれる資質・能力」別添	1) 資質 2) 知識 3) 能力 について平成12年報告に示された, 下記内容について該当する場合は, □に☑を付けてください。また, 活動分野及び役割別の 1) 資質 2) 知識 3) 能力 については, □以下に記載をお願いします。 1) 資質 ☑日本語ばかりでなく広く言語に対して深い関心を有している ☑鋭い言語感覚を有している ☑国際的な活動を行う教育者として, 豊かな国際的感覚を有している ☑国際的な活動を行う教育者として, 豊かな人間性を備えている ☑日本語教育の専門家として, 自らの職業の専門性を有している ☑日本語教育の専門家として, 自らの職業の意義についての自覚と情熱を有している ・日本語教育の専門家として, 自らの専門性に関して客観的に振り返る態度を有している 2) 知識 ☑外国語や学習者の母語(第一言語)に関する知識 ☑対照言語学的視点からの日本語の構造に関する知識 ☑言語使用に関する知識 ☑言語発達に関する知識 ☑言語の習得過程に関する知識 ☑日本の教育制度に関する知識 ☑日本の歴史・文化事情に関する知識 ☑諸外国の教育制度に関する知識 ☑諸外国に歴史・文化事情に関する知識 ・日本語教育や自らの専門性における課題を発見する観点・方法に関する知識 3) 能力 ☑日本語を正確に理解し的確に運用できる能力 ☑言語教育者として必要とされる学習者に対する実践的なコミュニケーション能力 ☑外国語や学習者の母語(第一言語)に関する知識, 対照言語学的視点からの日本語の構造に関する知識, 言語使用や言語発達及び言語の習得過程等に関する知識を活用する能力 ☑学習者のニーズに関する的確な把握・分析能力 ☑教育課程の編成, 授業や教材等を分析する能力 ☑教育課程の編成, 授業や教材等に対する総合的知識と経験を教育現場で実際に活用・伝達できる能力 ・日本語教育における問題, 自らの専門性における課題に対し, 取り組むことのできる能力
7. 養成・研修を担当する講師の資格要件や選定基準	大学としての採用条件を充たしていること以外に、特別な要件はない。
8. 現行の養成・研修プログラムの実施による成果・効果	・学部において各学年 30 数名が日本語教育系を選択し、そのうち、日本語教育に従事することになるのは 1 割程度である。 ・日本語教育系発足(1991 年)以来、国内日本語学校(専任、非常勤)、国内大学(専任、非常勤)、出版社(日本語教育関係)等で職を得る者、学校教育における日本語教育に従事する者、

	公務員として日本語教育・国際交流に関わる仕事を行う者、海外各種日本語教育機関で職を得る者、JF 国際交流基金日本語専門家、同指導助手、JICA 協力隊員等として海外に派遣される者などを輩出している。 ・受験対策指導は行っていないが、例年、学部段階で「日本語教育能力検定試験」を受験・合格する学生が複数名いる。
9. 現行の養成・研修プログラムにおける課題（改善を検討したい点）と展望	・日本語教育系を選択する学生には、日本語教師を志す者とそうでない者がいる。前述の「研修の目的」に示したように、いずれもが目的・目標を掲げて課程を修められるようになっているが、教師にならない学生にとって、より現実的な場を経験することを念頭に、日本語教師とは異なる立場での実習方法（インターン等）についても検討したい。 ・現行の課程は、平成 12 年の「日本語教育のための教員養成について」に基づいて設計されている。時代とともに、時間をかけるべき内容が変化してきたと考え、扱う領域・区分はそのままに、必修科目の内容及び単位数について、見直しを行いたいと考えている。
10. その他 (人材養成・研修に関する御意見・御要望などありましたら、記載してください。)	・人材育成は、長期的な展望の下、計画的かつ継続的に行うべきものだと思いますが、現在、学部での養成においては、日本語教育分野での就職についての見通しが立ちにくいいため、2 年次が終わる段階ですでに日本語教育は志さないとする者が多数を占めています。日本語教育を専攻した学生が、国際的視野を持つ人材、日本語教育に理解のある人材として他分野で活躍するのは喜ばしいことですが、日本語教育を専門とする人材がごくわずかしかならぬというのは、この分野・業界にとって大きな損失です。日本語教師の専門性を尊重し、無償労働や不定期雇用を前提としない枠組作りをしていく必要があるのではないのでしょうか。

学籍番号：

名前：

kaneda Ver.3

＜日本語教師としての能力に関するチェックリスト＞

*◎=たいへんよい、○=問題はない、△=不足している、?=何のことかわからない

	「日本語教師」に必要な知識、資質、能力 ＜主に「日本語教育Ⅰ」で扱う事柄＞	4/7 評価	7/ 評価	1/ 評価
1	日本語教育に関わる仕事の種類やその仕事に就くための方法について説明できる			
2	日本語教師になるために必要な資質・能力にどういったものがあるか説明できる			
3	国内の日本語学習者の状況や日本語教育の動向について説明できる			
4	海外の日本語学習者の状況や日本語教育の動向について説明できる			
5	国内外の日本語教育の状況や動向について調べることができる			
6	外国人の日本語を聞いたり読んだりして、問題点を適切に把握できる			
7	学習者の誤用・中間言語を分析し、その原因を推測することができる			
8	学習者の誤用に対し、適切な訂正をすることができる			
9	言語の「習得」に関して、代表的な考え方を説明できる			
10	日本語教育において「コースデザイン」で何をすべきか説明できる			
11	ニーズと学習内容の関わりについて説明できる			
12	教材や教室活動を見たときに、シラバスの種類を区別できる			
13	文型・文法を教える際に、どういった準備が必要か説明できる			
14	文型・文法の分析をし、教えるための下準備ができる			
15	日本語教育・学習を意識して、動詞や形容詞などを分類することができる			
16	場面重視の言語教育と文型重視の言語教育のそれぞれの課題を説明できる			
17	学習者の抱える問題や日本語学習における困難点を複数の視点から説明できる			
18	身近な地域の外国人住民や日本語教育の状況について紹介できる			
19	学習者のニーズ等に応じ、適切な教材を探すことができる			
20				
21	日本語教育の歴史について、いずれかの国・地域に関しての説明ができる			
22	外国語教授法に、どういったものがあるか概要を説明できる			
23	主な外国語教授法の特徴について説明することができる			
24	何らかの外国語教授法を実践できる			
25	目的・理論を踏まえ、具体的な教室活動・練習方法を、複数種類、実現できる			
26	言語教育で用いられる教材・教具について紹介できる			
27	日本語習得のために、効果的なタスクシート等の教材を作ることができる			
28	日本語能力の評価基準や方法について基礎的な情報を紹介することができる			
29	適切な態度・方法で授業を見学することができる			
30	授業見学時、教育理念や教室活動が適切に理解でき、説明できる			
31	「日本語教師」の専門性を自分がどの程度身に付けているか、何を伸ばすべきかを客観的に分析することができる			
32				
33				

*空欄には、自分自身の目標を入れてみてください。

〔日本語教育系での履修の流れ：例〕

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
日本語日本文学科専門科目	☆ 日 本 語 学 講 義 I ☆ 日 本 文 法 日本語・言語に関する学び	☆現代日本語研究 I 日本語の音声 ☆現代日本語研究IV 異文化コミュニケーションと日本語教育 ☆ 対 照 言 語 学 ☆ 日 本 語 学 概 論 ◇日本語学演習 ・現代日本語学文法の諸問題 ・言語学概論及び言語学に関するインディ ュー調査 他 研究方法に関する学び	現代日本語研究 II 伝え合うための日本語 III 現代日本語の文法 ☆ 言 語 学 講 義 ◇日本語学演習 ・日本語初級教科書の学習項目の分析 ・対照研究 他 教育・学習に関する学び	☆ 卒 業 論 文 ☆日本語教育Ⅲ：日本語教育の実践
	☆ 基 礎 演 習 I ☆ 日 本 文 学 講 義 I	日 本 文 学 概 論 ☆日本文学史概説 I / II / III	日 本 文 学 演 習 他学部専門科目：日本経済論 他	
その他	日本語日本事情関係科目 ・日本政治思想史 ・日本経済史 他 ☆総合基礎科目：基礎教養科目 ☆総合基礎科目：基礎教養科目 ☆総合基礎科目：情報科目 ☆ 外 国 語 (I) ☆ 外 国 語 (II) ☆スポーツ・健康科学科目	学科共通科目：現代学入門 他 ☆総合基礎科目：基礎教養科目 ☆ 外 国 語 (I) 外 国 語 (II)	外国語外国文化関係科目 ・比較言語学講義 ・中国文学講義 他 教える内容に関する学び 基礎的資質を高める学び	
日本語教育経験（希望者）	海外日本語教育研修（1 週間程度）*2016 年度は台湾			
	学内各種日本語教室：ボランティア日本語教室（豊島区との共催、火曜Ⅳ）、短期日本語研修、G C A、わくわくとしま日本語教室			
	外国語教育研究センターでの SA（Student Assistant）			
	豊島区教育センター学習支援			
	海外日本語教育インターンシップ（約 1 か月）*タイ、米国、豪州			
	日本語パートナーズ（JF 国際交流基金、半年～1 年）*ASEAN			

*履修年次が 2 年以降の専門科目について、履修順はあくまでも一例です。

*必修科目には「☆」、重複履修可の必修科目には「◇」。

* 内が緑色であれば 1 年次から履修可、青であれば 2 年次から履修可。色が無いものは、その年次に履修するべきもの。